

源塚



# 遺跡を 読む!!

平成24年度 公益財団法人印旛都市文化財センター企画展

発掘調査報告書を  
10倍楽しむ方法

平成 24年 12月8日[土] ~ 平成 25年 6月28日[金]

## 第1章 はじめに

『発掘調査報告書』を読んだことがありますか？

本の内容は、発掘調査された遺跡のあらゆる情報が記録されたものです。

例えば、古墳時代の住居跡が何軒あったのか、住居跡の形態はどういうものだったか、どんな器種の土器が出土したのか、胎土はどういうものであったか、在地のものか搬入品か△※○×#□・・・といったも、内容は専門的で、考古学に興味のある方でもなんのこつやらという人が多いと思います。

今回の企画展は、たびたび聞こえてくるこのような『発掘調査報告書』の内容がよくわからない!という声におこたえます!

この専門書といえる本も、ある一定の決まりごとと、注目するポイントがわかれば読みやすくなります!

次章からは、これらの『発掘調査報告書』を読む上での鍵となる“決まりごと”と“注目ポイント”をご紹介します。

ちなみに、発掘調査が終了すると、そのあとに家やお店が建ちます。開発に伴う調査が多いからです。

そうすると、今はもうない遺跡の内容を知る手がかりは『発掘調査報告書』のみになります。

そのため、調査において分かったことを正確に、丁寧に報告書として残さなくてはならないのです。

このような、『発掘調査報告書』のうち、印旛都市文化財センター刊行の全巻が考古資料展示室にも収蔵されています。

今回の展示をご覧いただいたあと、ぜひ、『発掘調査報告書』を手にとっていただければと思います。



## —遺構図の見方—

**縄文時代住居復元模型**

**平面図**  
(092号住居址) (091号住居址) (097号土坑)

**エレベーション図(遺構断面図)**  
(A-A'ラインの高低差をみる)

**セクション図(土層断面図)**  
(B-B'ラインの遺構の埋まり方をみる)

1層 黒色土層 ローム粒少、カーボン少、粘性あり、締まりあり。  
2層 褐色土層 ローム粒少、粘性あり、締まり強。

土層説明(遺構が埋まった土の特徴の記録)

住居跡【縄文時代】  
例) 長田雄子ヶ原遺跡(成田市)

エレベーション図(遺構断面図)の高低差をみる

スケール 0 2m

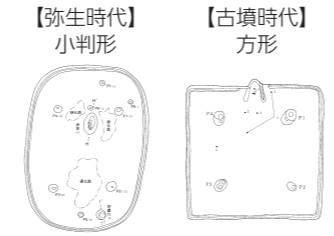
図の規模を示します

柱穴拡大

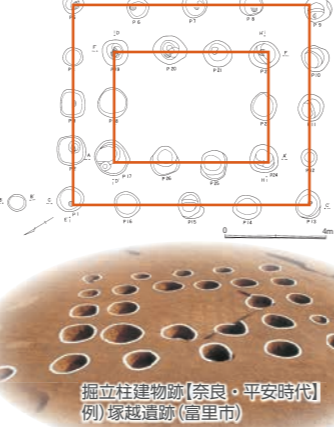
上端(太い線)  
下端(細い線)

平面図の上端・下端とエレベーション図の上端・下端は対応しています。

時代によって住居跡の形は違います。

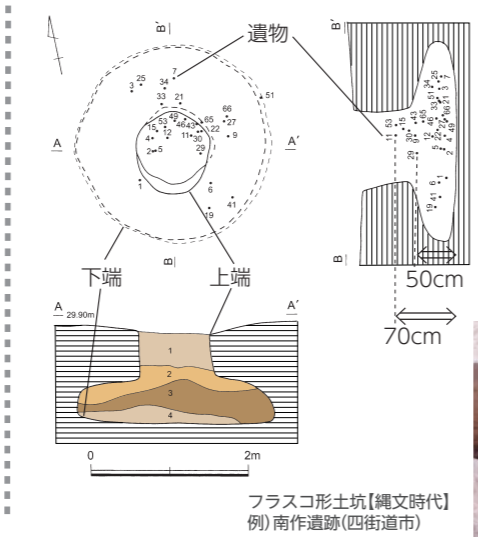
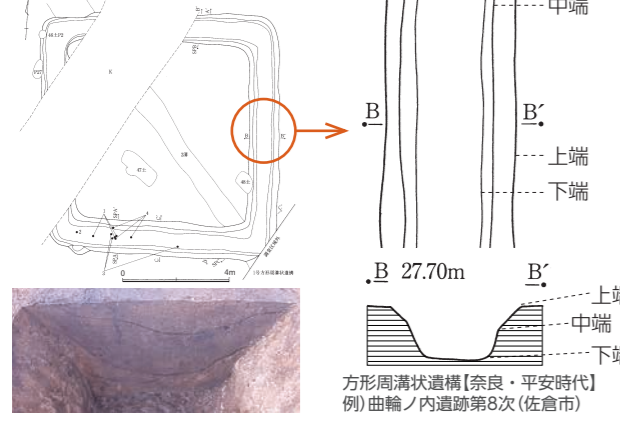


## 掘立柱建物跡は柱穴だけで表現します



## 【中端】もあります

中端がある場合、エレベーション図をみると、上端と下端の中間で掘り込み角度が変わることがわかります。

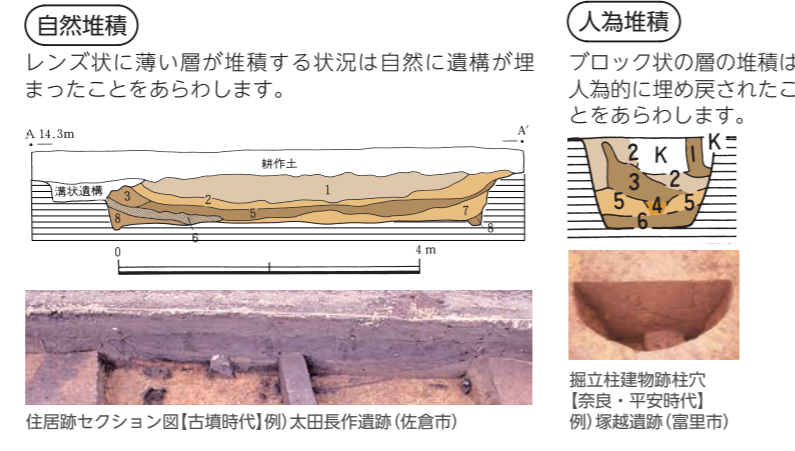


## 遺構には「切りあい関係」があります

古い空堀の上から新しい空堀が掘られているのがわかります。



## セクション図から遺構の廃絶の仕方がわかります



まとめ

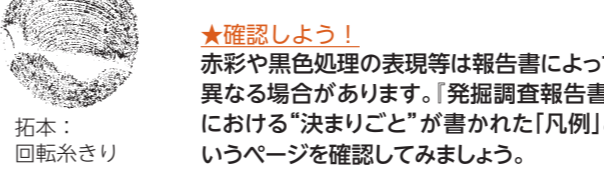
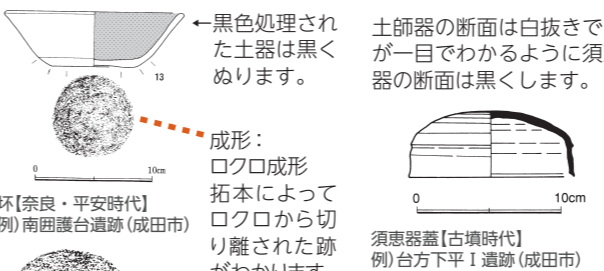
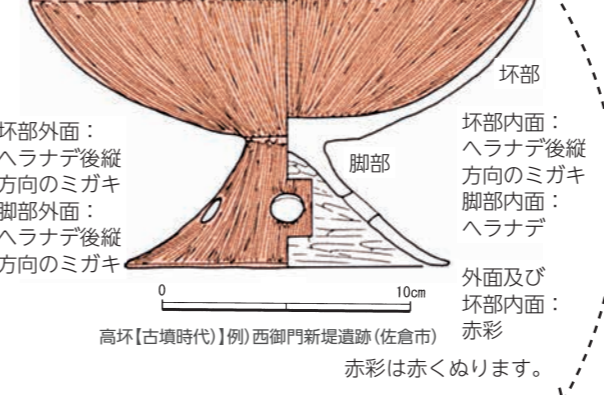
遺構の記録には様々なルールがあり、意図があります。ルール・意図を把握することが遺構図を読み解くための鍵です。コレがわかると、その遺構の構築方法及び過程、廃絶原因及び過程、新旧関係などが情報として得られ、立体的な構造イメージ、性格が推測できるようになります。さらに遺物の情報を加え、総合的に検討することによって遺跡の最終的な性格把握につながるのです。

## —土器の実測図の見方—

〔左側〕 土器の外表面を表現

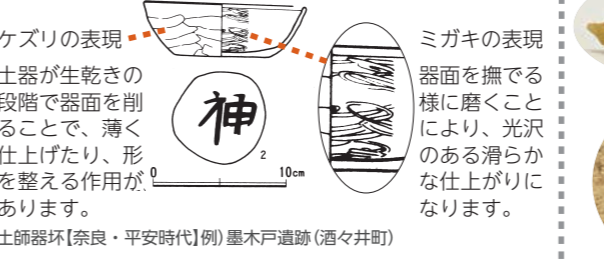
中心線

〔右側〕 土器の内面と断面図を表現



## 成形／調整

土器の作り方には粘土紐を積み重ねて作る輪積成形とロクロを用いて作るロクロ成形があります。このように形作られた土器を整えるために土器の表面には工具を用いて様々な調整が施されます。実測図では決められた表現によって土器に施された調整方法を描きこんでいきます。



まとめ

1つ1つの土器の形や作り方、文様、胎土などを詳細に観察した結果が、報告書には図と文章で載っています。観察を積み重ね、その結果を比較、検討することによって、昔の人たちの生活に、密接に結びついて使われてきた土器がいつ、どこで、何のために作られたのかを探っていくことができるのです。

## 土器といっても形はさまざま

時代によっても変化がみられます。



土器って？

輪積みによる成形で、野焼きで焼かれるため、須恵器に比べて焼成温度は低く軟質で、褐色や赤褐色の色調をしています。主に古墳時代～平安時代に使われる名称です。

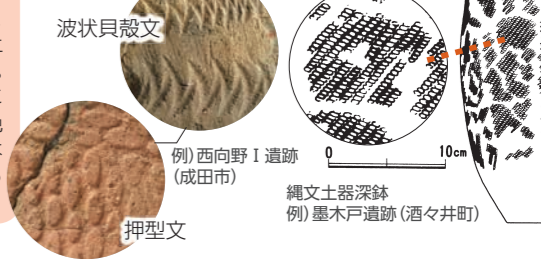
文様

★実物と見比べてみよう！

縄文土器や弥生土器には様々な工具を用いて文様が描かれています。特に縄文土器の文様は種類も豊富で複雑！実測図では、縄文の向き・施文の方法や順序が重要になってきます。

須恵器って？

ロクロを使用して成形し、窯によって焼かれる点が土器との大きな違いです。高温で焼かれるため非常に硬質で、灰色や青灰色の色調をしています。わが国には5世紀代に大陸から伝わったと考えられています。



## 胎土 どこで作られたかわかる！？ 胎土とは？

土器の観察表には、「胎土」という項目があり、土器の土に含まれる混入物などが記載されています。胎土に含まれる混入物の多さによっては、【産地】が分かる場合もあります。



▲土の肌理が細かく、在地のもの比べて混入物が少ないのが特徴の1つです。また、時期によって異なりますが、猿投産には黒色の粒子を多く含み、陶邑産では断面が茶褐色である点が特徴として挙げられます。

白色パミス(白色の軽石粒子)を多く含みます。

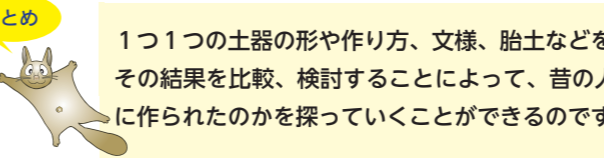
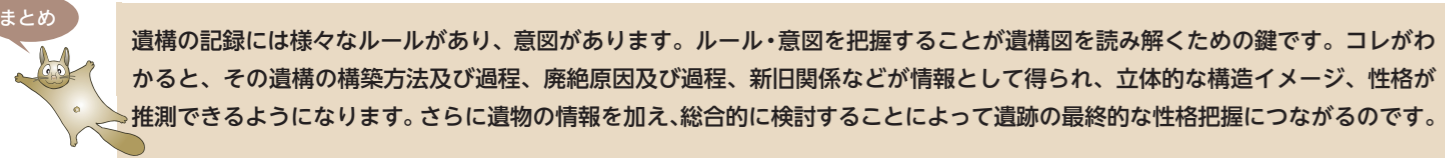
搬入品土師器【弥生後期～古墳初頭】  
例) 東駿河・伊豆  
例) キサキ遺跡(成田市)

ハケ目とは器面をかき均すために用いた板状工具の擦痕のことです。この調整痕をよく観察すると、用いられた工具の大きさや幅等の「単位」がわかり、写真の調整痕では、幅約1.5cmの工具を用いたことが読み取れます。

ハケ目壺【古墳時代】例) 西御門新堤遺跡(佐倉市)

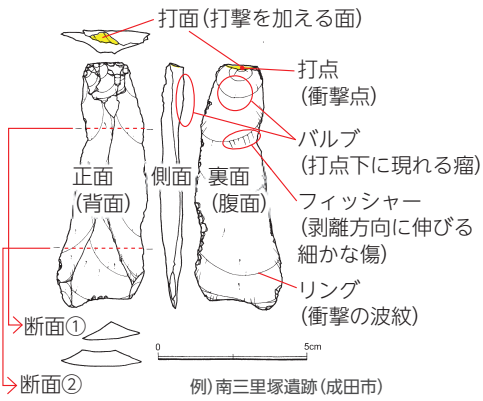
▲東海地方の物に比べて土に含まれる混入物は多く、赤色や白色の粒子を含むものがみられます。また、胎土だけでなく底部に手持ちヘラケズリを施した調整方法や、茶褐色・赤褐色の色調をしている点など、同時期の東海地方の物と比べてもその差は歴然です。

在地産須恵器坏身【古墳時代】  
例) 下方内野南遺跡(成田市)

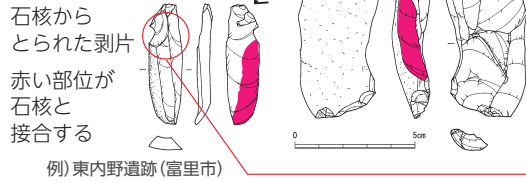


## —石器実測図の見方—

石器実測図の基本的な配置と各部位の名称

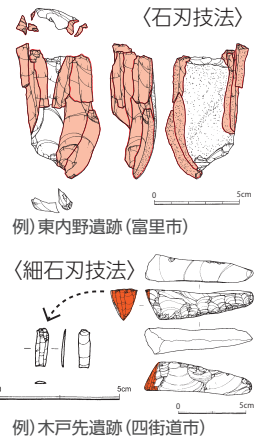


## 作る



## 剥離方法の技法化

同じ規格の剥片を大量生産する方法



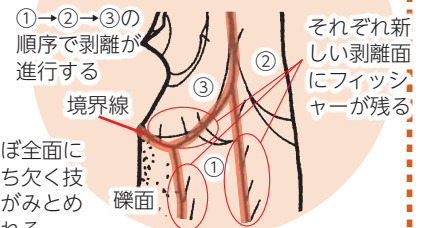
## 剥片(石核から得られる破片)

剥片石器とは剥片を素材にして加工された石器のことを指します。この時の加工(色を塗った部分)の範囲や加工の意図などを読み取ることで、様々な石器の種類を区別しています。

## 石核(剥片を得るための大きな塊)

## 重要!!! 剥離面の切り合い関係

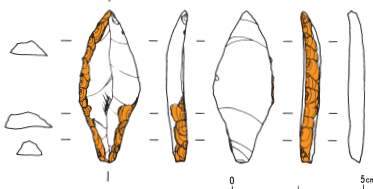
剥離面同士の境界にみられる“リング”や“フィッシャー”を手がかりに、剥離面の作られた順序(前後関係)を読み取ることができます。



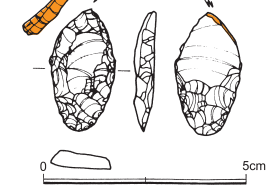
## 剥片石器

### 【旧石器時代】

ナイフ形石器(刺す、切る)



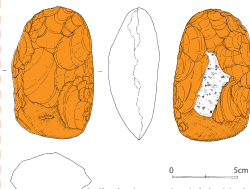
彫刻刀形石器(彫る、削る)



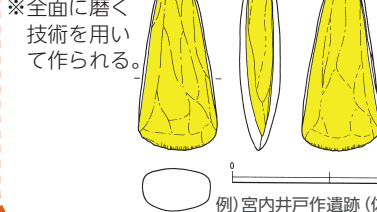
## 石核石器

### 【縄文時代】

打製石斧(掘る)



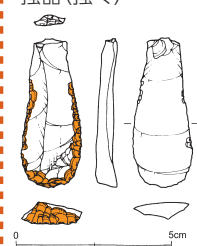
磨製石斧(伐採)



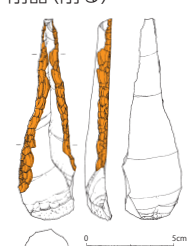
独钻石(祭祀具?)



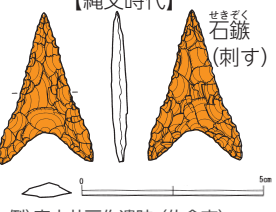
搔器(掻く)



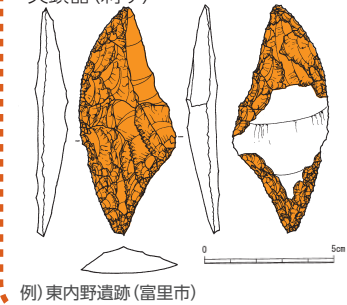
削器(削る)



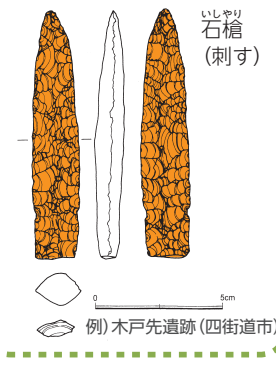
### 【縄文時代】



尖頭器(刺す)



石槍(刺す)



## 使う

〈刺す〉

折れる(折れ面)

尖頭器

例) 木戸先遺跡(四街道市)

例) 墨新山遺跡(酒々井町)

〈切る〉

刃こぼれ(微細剥離)

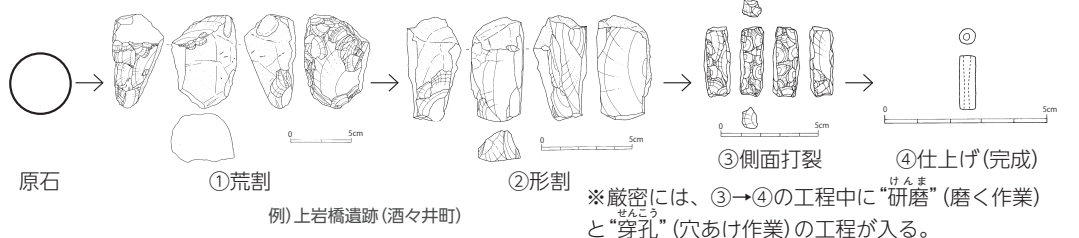
使用痕のある剥片

例) 墨新山遺跡(酒々井町)

▲石器には“折れ”や“刃こぼれ”などの痕跡(使用痕)が残されることがあり、使用方法を解明する糸口となります。

## 玉類(装飾品)の作り方

製作跡(工房)があった遺跡を発掘すると、様々な材料が残されていることがあります。それらを素材から完成品まで加工頻度順に段階的に並べることで完成品の作り方(工程)を復元し、読み解くことができます。



まとめ

石器は形から判断するだけでなく、基本的には剥離面を一面一面観察し読み取って理解していきます。特に旧石器時代の石器などは、加工技術が未発達であることから、単に形(形式)から石器の種類(器種)を判断することは容易ではありません。ただし、剥離面を観察して加工技術の性格(ポイント)を捉えることができれば、形が整っていない石器も理解していくことが可能となります。

